



米沢有為会 仙台支部だより

第 18 号

平成30年1月5日

発行者

(公社)米沢有為会仙台支部

支部長 甲 國信

仙台市青葉区角五郎2-6-21

TEL 022-222-4790

支部総会・鈴木修治氏講演会

於：仙台ビジネスホテル

H29年6月3日



有為会の近況

昨年5月以降の有為会の近況を報告します。

【会員数】

6月3日の総会後、個人会員3名（正会員2名、個人賛助会員1名）の入会があり、12月10日現在の会員数は個人会員90名（正会員51、個人賛助会員39）、法人賛助会員2社となっております。

【創立百二十周年活動ビジョン（案）への会員からの意見募集】

6月に大滝則忠会長の新執行部が発足して以来、理事会で議論されてきた創立百二十周年活動ビジョン（案）がまとまり、会誌67号に掲載されましたのでご一読ください。理事会は、この活動ビジョンに対する会員の皆様からのご意見を募集しております。詳しくは会誌67号をご覧ください。

【29年度支部通常総会・講演会・懇親会】

29年6月3日
会場 仙台ビジネスホテル
【総会】 参加者17名 事業報告、決算・予算、事業計画が承認された他に、支部規則が制定されました。

【講演会】 参加者22名

講師 鈴木修治氏（公益財団）宮城県結核予防会健康相談所興生館所長、米沢有為会仙台支部理事
講演題目「宮城県における結核・肺がん検診の概要」

結核と肺がんの現状、早期発見の重要性について詳しく話していただきました。講演内容の詳細については有為会誌67号の「支部だより」に掲載しております。

【夏の交流会（花火鑑賞会）】

29年8月5日
会場 仙台興譲館 参加者、会員5名、会員親戚等2名、寮生7名



この夜は雲が低く垂れ込め、一万六千発の花火はことごとく雲の中に吸い込まれてしまいました。肝心の花火が開く様子は全く見えませんでした。東京から若い女性二人（参加された会員の姪御さんとお友達）の飛び入り参加があり、テーブルには花が咲きました。

・秋の交流会（芋煮会）

29年10月7日

会場 仙台興譲館 参加者 会員8名、家族2名、寮生13名、計23名
 昨年同様、この日はあいにくの雨で、会場を寮の食堂に変更しました。天気は良くなかったものの、米沢から取り寄せた材料で寮生が作った芋煮は、いつもながら好評でした。

・第2回支部理事会

29年11月18日

会場 仙台ビジネスホテル
 議題 新入会員の入会承認 130周年記念の仙台寮改修について 理事の役割分担について
 意見交換 慶弔規程・支部規約の一部修正について

（支部長 甲 國信）

会員のコーナー

私の愛読書

池波正太郎作品から

大武 清夫

数年前不整脈がみつかり、仙台厚生病院に検査入院し、無事退院することができた。その冬は、例年になく寒かったこともあり、体に無理をかけてはと悪い炬燵に入って本を読んで時間を潰そうと、読書に没頭した。

どのような本を読もうかと迷ったが、手取り早くテレビで放映され人気を博している「鬼平犯科帳」「仕掛人・藤枝梅安」「剣客商売」所謂、池波正太郎の三大作品を読むこととし、直接出版社から購入し読んだ。後日数えたら、300冊読んでいた。また、ベッドの横には池波コーナーを設け、読みたい時は常に引き出して読めるようにセットし、今では池波通の一人とほくそ笑んでいる。

池波正太郎は、元号が昭和から平成に変わった翌年の平成2年5月3日急性白血病で亡くなった。享年67才あ

まりにも早過ぎる旅立ちであった。池波の真名弟子の佐藤隆介（昭和11年生れ）によると、池波は「剣客商売」の主人公・秋山小兵衛を書きながら、小兵衛と共に少なくとも90才後半までは長生きする予定であったとのことである。

池波小説の三大シリーズと言えは、「鬼平犯科帳」「必殺仕掛人」「剣客商売」であるが、この三つの大作を読んでも、秋山小兵衛だけは鬼平とも梅安とも明らかに生きざまを含め違うような気がする。鬼平こと火盗改め長官の長谷川平蔵も、仕掛人藤枝梅安も、作品の中では「齡をとらないのである」ところが小兵衛だけは作中で、作者池波と同じように、老いの道を歩んでいるように感じるのである。小兵衛は、大川・荒川・綾瀬川の三川が合流する鐘ヶ淵にひっそりと住んでいる。身のまわりを世話するのは、「おはる」、齡は19才、小兵衛よりも40才も年下の孫のような下女に手をつけての結果である。この時、池波は49才。多分池波は、自分自身の最後の理想を、この「剣客商売」で描こうとしたのではないかと思う。

男として選んだ自らの道を小兵衛は剣の道をまっとうし、頂点をきれいさっぱりと身を引き、孫のような若い女と気ままな暮らしを楽しみながら、一人息子大治郎の成長を見守っている。こ

んなうらやましい老後は、現実にはなかなかあるものではない。息子を持たれている諸兄は、子供はこう育ていくのだということをこの作品は教えてくれると思う。是非、「一読願いたいものである。また、「鬼平犯科帳」の長谷川平蔵は歴史上の實在人物であるが、「鬼平」は池波が創り出した人物でもあり、「男が生きる」ということはどういふことか、どういふことでなければならぬか、その理想像を池波は鬼平に託しているような気がする。池波には息子がいない。そのためか、鬼平の息子辰蔵のことを書くとき、池波は「父とはかくあるべきもの」という理想の姿をそこに描いているような気がする。われわれ読者としては、憧れる父親像がそこに生まれてくるのだと思う。

また、池波は一般的には「食」を主題とするエッセイを数多く遺している。そのため、池波を「食通」や「グルメ」の一人と思っているファンも多く、小生もその一人かもしれない。真名弟子の佐藤隆介は、池波は食通でもなければグルメでもなかったと言っている。毎年、長者番付の上位に名が上がるほどの超人気作家であったことから、どんな贅沢も出来る人だったはずだが、金に飽かせて美味をむさぼることは決してなかったとのことである。その代わり、毎日の一食一食を、たとえ、一杯

のラーメンでも死ぬ気で食べていたと
のことである。茶ノ湯でいふ、一期一会
の覚悟であるといつてよいのではない
かと思う。ところで、池波は数多くの男
に関する、作法・心得、など男が生きて
いく上での所謂、常識について多くの
作品を残している。その中から小生の
心に残ったいくつかを紹介してみたい
と思う。

○店構えについて

この店はよさそうだとか、この店は
駄目だとか、初めての店の場合どうや
って見当をつけたらいいのか迷う場合
が多い。池波は、例えば食べもの屋とい
うものは店構えを見ればだいたいわか
るといつている。いまは昔と違ってど
こも同じような店構えだが、中に入っ
た場合、まずトイレがきれいな店でな
ければ駄目だといっている。ホテルの
場合もそうだが、「神経の回りかた」と
いうことだと思ふ。どんな仕事でも同
じだが、こういうところまで神経が回
っていないと、出すものだって、神経が
回っていないということを書いてある
のだと思ふ。

○勘定について

特に鮎屋というところは、高い店へ
入ったらいくら取られるのかわからな
いという怖さがある。こういうときは、
ちよつと入り口のガラス戸から中を見
て、椅子とテーブルがあれば安心だと

いつている。椅子とテーブルがないと
ころは、おほみを食べるといふところ
で、当然ながら勘定は高いものとなる
ことを覚悟しなければならぬ。

初めての店の場合、テーブルに座
って、一人前をお願いしますと下手に
出た方が店の方もよろこぶのである。
名の通ったところは、たいてい常連が
おり、常連の座る席へいきなり座って
しまうことは、お金を払うのだからど
こへ座ってもよいというわけにはいか
ない。やはり一番隅の方へまず座り、そ
して一通り握って下さいと言えよ
のだといっている。このようにすれば、
どこの鮎屋へ行っても決していやな顔
はされない。そうするとこちらの方へ
おいで下さいといわれたら、そちらの
方へ行く。こういうふうになれば、この
人は初めてだけど礼儀正しいと喜んで
くれるはずである。

○つま楊枝について

現役時代に昼時になると電力ビル
から出てくる社員がよくつま楊枝をく
わえサンダルを履いてビルから出てく
る社員が多かったのを覚えていた。こ
のような様子を見て自分なりにみつと
もないと思つていたものである。特に、
若い生意気盛りの社員は、くわえ楊枝
をして外へ出てくる人が多かったよう
な気がする。昔は、大人が厳しかったこ
ともあり指導することもあったが、今

はどうだろうか。人間というものは、自
分のことはあまりわからないものであ
る。「刺客商売」の一節にもあるが、た
いていの男は思ひ出したくない苦い過
去を持つていっているものである。それは若
さゆえの傲慢さや無知の象徴と思ふ。
世の中にもまれ、年長者の叱責を受け
ながら、人は隠された自分を発見し成
長していくものだと思う。

○病気について

池波は病気について次のようなこと
をいつている。まず、自分の躰とはどう
いうものかを知らなければならぬ。
自分の躰を知らないで、何かというた
びにやたらめつたら医者に行く。注射
を打たれて薬を飲まされて。池波の場
合は背中が大事だと言つていふ。背中
に肉がつくと大事な血管が肉で押され
ることになり、方々が悪くなる。すべて
の人間の躰は、血管なのだ。血の流れ、
血のめぐりが悪くなると病気になつて
しまう。また、健康管理の上で、入浴と
いうものは、非常に大きな意味を持つ
ていふ。あらゆる人間の躰の病気の根
源は血の循環だから、入浴をすれば血
の循環がよくなる。入浴は毎日一回は
必ずした方がよい。冬なんかには、今日
ちよつと寒い、風邪引きそうだなあと
思つたときは、入浴しても背中は洗わ
ない方がいい等と池波は健康に留意し
ていたことをいろいろと書いていふ。

三大作品の中にも随所に書かれている。
本有為会には数多くのお医者さんがお
られるが諸先生方のご高説を総会の時
にでも拝聴したいものである。

この池波は作品の中で示唆に富ん
だことを数多く書いておられ、小生が
生きていく上での指標ともなつてい
る。余白の都合もありこの辺で筆を置くこ
とにするが、いつか機会があつたら再
度紹介したいと思ふ。(寿命・死・生・
運命・理想等について…)

(米沢有為会仙台支部理事 仙台市
太白区在住)

新入会員紹介

- 芦川絃一さん H29・8・12入会
- 仙台市青葉区西勝山(正会員)
- 高井良尋さん H29・9・1入会
- 仙台市泉区虹の丘(正会員)
- 原田喬之さん H29・9・25入会
- 仙台市若林区(賛助会員)

仙台支部年間行事予定

- ※仙台興譲館寮行事
- 1月20日(土)
- ※新年会兼卒業生歓送コンパ(寮生会
主催) (会場:仙台興譲館)
- 2月 第3回理事会

※2～3月 温泉旅行又は食事会
 ※3月11日(日) 入寮面接
 (会場:置賜文化センター)
 ※3月 末日 寮生総会

行事報告

秋の交流会(芋煮会)

H29年10月7日
 会場 仙台興譲館
 参加者 会員8名、家族2名、寮生
 13名、計23名



興譲館寮忘年会(寮生会主催)

H29年12月9日
 会場 仙台興譲館
 参加者: 会員10名 寮生14名



寮のコンセント故障顛末記

11月末寮長から2部屋のコンセントに電気が来なくてコタツ・石油ファンヒーターが使えず寒くて困ると電話があった。1階の倉庫の配電盤を見てもブレーカーは落ちていないという。東北電力のコールセンターに電話して修理業者を斡旋してもらうよう指示をした。コールセンターの電話番号を調べて「電気工事110番」という民間業者に電話し、青葉区中山から修理業者がやって来た。配電盤を見たが原因がわからず自分では直せないという話であったという。応急処置ならやれるという話で、とにかく寒いのでそれを頼んだという。業者は戻って材料・道具を取ってきて、電灯の配線からコンセントに線を繋ぎ、寮長は工事代金1万6千円程を払った。それを電話で聞いて、全く危険で、火災の恐れもあるということで翌日寮の関係者4人が寮に集まりその状況を調べてみた。私は配電盤は1個で、右側の部分には建設当初は200ボルトの床暖房が入っていたのでそのブレーカーが付いており複雑で、いまいち理解できないと感じていた。部屋の応急処置の工事を点検して、理事の加川さんが二階の倉庫に案内した

のである。二階の倉庫にはご祝儀の酒しか入っていないと思っていたが、もう1つの配電盤があるのにその時初めて気付いた。加川さん以外は誰も知らなかったのである。見ると1つだけブレーカーが落ちていたのである。まったくお粗末な話でした。

12月、忘年会の始まる前寮生全員を集め加川さんから電源が入らない故障が起きた場合の処置、ドライヤーなどの電気器具の使い方などについて詳しく説明して頂きました。(滝口館長 記)

編集後記

昨年は何かにつけ激動の年でありました。よく考えてみると動きのない世界などはないのでありますが。本年はいい年であることを願うのみです。大武理事から玉稿を寄稿頂き感謝申し上げます。

「寮の植物の話」として裏庭のイエギクの由来を準備していましたが、ページ数の関係で次号に回します。

有為会誌の発行の遅れで発送作業が正月にずれ込んでしまいました。日本海側は大雪との報道ですが、幼き頃の雪との毎日の格闘―朝晩の道付け、雪囲いで11月～4月まで暗い家の中の生活などを思い出しています。

(編集責任者 滝口 記)